

瞑想者の認識をめぐる ダルモータラの考察

——『知識論決択注』を中心に——

石 田 尚 敬

0. はじめに

8世紀インド、カシミールの地で活躍したダルモータラ（法上 Dharmottara, 740–800頃）は、後代、「注作者」（*Tīkākāra*）と称される¹⁾。その名の由来は、仏教認識論・論理学の大成者ダルマキールティ（法称 Dharmakīrti, 7世紀頃）の主要な著作に、注釈書を残したことに他ならない。関連する注釈書として、以下の2点が知られる。

1. 『知識論決択』（*Pramāṇaviniścaya*）の注釈書『知識論決択注』（*Pramāṇaviniścayaṭīkā*）
2. 『論理の滴』（*Nyāyabindu*）の注釈書『論理の滴注』（*Nyāyabinduṭīkā*）

注釈対象となったテキストのうち、ダルマキールティの『知識論決択』は、その主著であり、第1章知覚論（*pratyakṣa*）、第2章推理論（自己のための推理 *svārthānumāna*）、第3章弁証論（他者のための推理 *parārthānumāna*）の全3章という、後代の論理学書で一般的となる章構成が採用された最初の作品である。本書については、チベット自治区でサンスクリット語原典写本が発見され、参照可能となっている²⁾。しかし、ダルモータラの注釈書については、第2章後半から第3章までのサンスクリット語原典写本が現存するのみ³⁾、本稿に

関わる第1章については、他文献での引用・言及などを通して原典の一部が知られるのみであり、全体としては、唯一残されたチベット語訳を参照する必要がある。

一方、『論理の滴』は、『知識論決択』に基づき、同じ章構成を採用しながら、より簡潔な入門書として著されている。本書は、ダルモッタラの注釈書とともにサンスクリット語原典写本が知られ、19世紀後半には校訂出版が果たされていたことから、仏教認識論・論理学の格好の入門書として、長く利用されてきた⁴⁾。さらに、ダルモッタラの『論理の滴注』に対し、ドゥルヴェーカミシュラ (Durvekamiśra, 11世紀初頭) の『複注』 (*Dharmottarapradīpa*) がサンスクリット語原典で現存することも有用である。ドゥルヴェーカミシュラは、ダルモッタラの『論理の滴注』を注釈する場合にも、同著者の『知識論決択注』にしばしば言及し、『知識論決択注』のテキストを暗黙のうちに自らの解説文として利用していることも多い。したがって、チベット語訳のみが現存する『知識論決択注』のサンスクリット語原典を、ある程度想定することが可能となる。

本稿では、筆者がこれまでに論じた⁵⁾、仏教認識論・論理学派のヨーガ行者の認識をめぐる考察を補足するものとして、ダルモッタラの見解を考察することとしたい。その際、ドゥルヴェーカミシュラの『複注』を頼りとして、『知識論決択注』と『論理の滴注』の議論を比較しつつ、その見解を見ていくこととしたい⁶⁾。

1. ダルマキールティの諸著作におけるヨーガ行者の知覚の議論

本稿では、ダルモッタラによるヨーガ行者の認識の議論を中心に考察するが、最初に、ダルマキールティの諸著作におけるヨーガ行者の認識の議論の位置づけについて、ダルモッタラおよびドゥルヴェーカミシュラの言及を頼りに、確認しておきたい。

ダルマキールティは、各書においてヨーガ行者の知覚を論じているが、後代さかんに引用されることとなる、『論理の滴』の定義を参照

したい。ダルマキールティは、直接知覚は4種類であると言明した上で、感官知、意識知、自己認識を順に解説した後、以下のように述べる。

「そして、真実の対象を修習する昂揚の極限に生じる、ヨーガ行者の認識である。」

bhūtārthabhāvanāprakarṣaparyantaṃ yogijñānaṃ ceti. (NB 1.11)

『論理の滴』では、ダルマキールティ自身によって定義が与えられているのみである。この箇所でのドウルヴェーカミシュラの説明を参照しよう。

「諸々のヨーギンの修習の階梯 (*bhāvanākrama*) は、『知識論決択』において、「聴聞によって生じる」(PVin 1 27,9) 云々によって述べられた。[そして、] 修習の昂揚と明瞭な顕現を持つことのふたつが因果関係にあることは、同じ [『知識論決択』] において、「愛欲や憂い」(PVin 1 27,13) 云々によって示された。そのように、本書 (『正理の滴』) でも理解されるべきである。」

yādrśo yogināṃ bhāvanākramo viniścaye śrutamayetyādinābhihītaḥ, yathā bhāvanāprakarṣaviśadābhatvayoḥ kāryakāraṇabhāvas tatraiva kāmāśoketyādinā darśitaḥ, tathehāpi draṣṭavyaḥ. (DhPr 68,5–6)

ここで、『知識論決択』において、「修習の階梯」が述べられると指摘されていることに留意しておきたい。そのことは、本稿第3節で、ダルモータラの解説とともにみることにしたい。次に、ダルマキールティの初期の著作である『知識論評釈』(*Pramāṇavārttika*) の位置づけについて、ダルモータラの『知識論決択注』のチベット語訳を参照しよう。

'phags pa'i bden pa bzi po rnam ji ltar tshad mas rnam par dag pa dañ | mi rtag pa la sogs pa de dag rnam pa ji lta bu žig (D : om. P) bsgom par bya ba dañ | skye ba brgyud pa du mas dus ji srid kyi mthar thug par goms par bya ba dañ | rgyu gañ la goms par byed pa byañ chub sems dpa' rnam kyi ni sñiñ rje las yin la | de la gžan rnam ni 'khor ba las yid byuñ ba žes bya ba gañ yin pa de thams cad ni | ji ltar

tshad ma rnam 'grel du gtan (D : bstan P) la phab pa'i rnam pa de ñid kyis 'phags pa'i bden pa mthoñ ba thabs dañ bcas | yul dañ bcas | rnam pa dañ bcas par khoñ du chud par bya ste (em. : byas te D P) | 'dir ni yañ dag pa'i yul can gyi rnam par rtog pa goms pa las de'i don la dmigs pa'i mñon sum skye ba ñid do zes bya ba de tsam žig bsgrubs (D : bsgrub P) par 'dod pa 'ba' žig tu zad do || (PVinT₁ D118a4-6, P136a5-8)

このチベット語訳に相当するダルモータラのテキストは、ドウルヴェーカミシュラによって利用されているので、そちらを参照し、また和訳してみたい。

「それら [四] 諦の、無常性などに対して修習されるべき様相 (*ākāra*)、多くの生まれの連続に付き従い、有る限りの時間を附帯要素とする (= 輪廻の続く限り継続する) 修習、諸菩薩の慈悲という修習の動機、[また] 他の者たちの輪廻の憂いであるそれ (修習の動機)、それらすべては、『知識論評釈』で確定されている。その通りに本書 (『論理の滴』) でも承認されるべきである。」

yādrśās cākāras teṣāṃ satyānām anityatvādike bhāvanīyaḥ, yāvatkālavadhikā ca bhāvanānekajanmaparamparānuyātā, yac ca nibandhanam bhāvanāyāḥ karuṇā bodhisattvānām, tad anyeṣāṃ saṃsārodvegah, tad api sarvaṃ yathā pramāṇavārttike nirñūtaṃ tathehāpy anugantavyam.

(DhPr 68,7-9)

ここでは、修習の対象が四諦であり、それが無常性 (*anityatva*) などに対して修習されると述べられるとされる。また修習が、繰り返す輪廻の中で継続されること、さらには修習の動機が菩薩の慈悲や輪廻の憂いであることなど、仏教の伝統における修習の意味づけが、『知識論評釈』で述べられていることがわかる⁷⁾。

2. ダルモータラの捉えるヨーガ (*yoga*)

本節では、ダルモータラの論じるヨーガ行者の認識を考察するため、ダルモータラの捉えるヨーガ行者 (ヨーギン) ないしヨーガの

意味についてみておきたい。『知識論決択注』において、ダルモータラは、ヨーガを世間的な常識 (*lokaprasiddha*) と教説 (*śāstra*) のレベルに分け、解説を与えている。

「世間一般においては三昧 (**samādhi*) に対して「ヨーガ」 (**yoga*) [と言われる] のだが、教説では、三昧 (**samādhi*) と智慧 (**prajñā*) を本質とする〈止〉 (**śamatha*) と〈観〉 (**vipaśyanā*) に対して [ヨーガと言われるの] である。そして、ヨーガを持つ者たちが「ヨーギン」であり、常に平静を保ち、真実を識別することに専心する者である。」

jig rten na ni mñam par g'zag pa la rnal 'byor pa yin la | bstan bcos las ni tiñ ne 'dzin dañ śes rab kyi bdag ñid źi gnas dañ lhag mthoñ la yin te | rnal 'byor ba de dag la yod pa de dag ni rnal 'byor pa ste (em. : pas te D P) | rtag tu mñam par g'zag pa dañ | de kho na rnam par 'byed pa la (D : las P) brtson pa'o || (PVinT₁ D117b2-3, P135b1-2)

ダルモータラは、『論理の滴注』では、ヨーガを三昧 (*samādhi*) と注釈するのみである (NB† 70,2)。しかし、『知識論決択注』では、明確に止観の二側面に触れていることは興味深い。ドウルヴェーカミシュラは、複注を著すにあたり、ダルモータラの注釈書ごとの説明の違いを、会通しようとしている。

「ヨーガ行者 (*yogin*) という語を解説して述べる。「ヨーガ」云々 (NB† 70,2)。三昧とは、心がただ一つの対象をもつことである。ここ (『論理の滴注』) においては、ダルモータラは、世間一般の常識に従っている。しかし、『(知識論) 決択注』においては、学説における定説 [を述べている]。したがって、矛盾はない。あるいはむしろ、[ダルモータラが『論理の滴注』で述べる] 「三昧」というのは、比喩的表現 (*upalakṣana*)⁸⁾ であるので、識別する能力を持つ洞察知 (智慧) も理解されるべきである。それ (三昧と智慧) を持つ者、すなわち常に平静を保ち、識別することに専心する者が、ヨーガ行者である。」

yogīśabdasya vyutpattim āha — yaga iti. samādhiś cittaikāgratā. iha dharmottareṇa lokaprasiddhir āśritā. viniścayaṭīkāyām tu śāstrasthitis tenāvirodhaḥ yad vā samādhigrahaṇasyopalakṣaṇatvāt prajñā ca vivekakarāṇaśaktir draṣṭavyā. sa yasyāsti, sa nityasamāhito vivekakarāṇataparāś ca yogī. (DhPr 70,19–22)

ダルモッタラの説明は、単なる語義解釈だけのようにも見えるが、後代、「ヨーガ」の語が説明される際、必ず止と観の二つの側面が言及されることとなる点では、意味を持つものである⁹⁾。また、『知識論決択注』と『論理の滴注』において、ダルモッタラが説明を変えていることは、専門書と入門書という論書の性格を認識して、注釈態度を変えているという点でも興味深いものであろう。

3. 修習の階梯について

ドゥルヴェーカミシュラが言及していたように、ダルマキールティが『知識論決択』で述べる〈修習の階梯〉(*bhāvanākrama*)の説明は、仏教内外の典籍でも盛んに言及される¹⁰⁾。ダルモッタラの注釈を見る前に、ダルマキールティのテキストを確認しておきたい。

「諸々のヨーギンが、聴聞によって生じた知によって対象を捉え、論理的思索によって [生じた知によってその対象を] 設定し修習するとき、それ (修習) が完成した時点で、恐怖などのように、明瞭な顕現を持った [知] が生じる。それは、概念を離れ、無転倒なものを対象とし、知覚である¹¹⁾。」

yoginām api śrutamayena jñānenārthān grhītvā yukticitāmayena vyavasthāpya bhāvatātām tanniṣpattau yat spaṣṭāvabhāsi bhayādāviva, tad avikalpakam avitathaviṣayam pratyakṣam. (PVin 1 27,9–11)

それでは、本テキストに対するダルモッタラの注釈を参考にし、ダルモッタラがいかに修習の階梯を説明しているのか、考察してみたい。

「聴聞によって生じた [、すなわち] 修習に適した論書を聴聞したことに基づく [知によって] 修習されるべき対象を捉え¹²⁾、

——論理によって [、すなわち] 正しい認識手段 (*tshad ma*) に
よって思索し、確定的に把握するのが論理的思索である——それ
に基づく知によってその対象をはっきりと識別し、知に想定し、
設定して、修習する [、すなわち] 修習をなしている。彼らに、
修習が完成 [、すなわち] 諸々の対象に対して明瞭な形象を持つ
知が生じることができるようなる原因となる力がある時、明瞭な顕
現を持った [知が生じる]。」

thos pa las byuñ bas bsgoms pa dañ rjes su mthun pa'i bstan bcos mñan
pa'i rgyu can gyis bzun ba ñes pa'i don bsgom par bya ba | rigs pas te
tshad mas sems śiñ ñes par rtog pa ni rigs pa sems pa'o || de'i rgyu can
gyi śes pas don de khyad par du rnam par phye bar blo la bkod ciñ b'zag
nas sgom par byed pa'i sgom par byed pa de rnams kyi sgom pa rdzogs
śiñ don rnams la gsal ba'i rnam pa can gyi śes pa skyed par nus pa'i
rgyur gyur pa'i mthu ste yod pa na gsal bar snañ ba gañ yin pa'o ||
(PVinT₁D117b3-5, P135b3-5)

ここで述べられるように、正しい認識手段——それは推理であろう
——によって確定されていることにより、ヨーギンの認識の正しさが
確定される。

ここで、仏教論理学派が認識手段をいかに位置づけていたか、『知
識論決択』第1章末尾の言明を確認しておきたい¹³⁾。

「以上は、経験世界(世俗)の認識手段 (*pramāṇa*) の性質が解
説されたのである。これについてさえ、他の人々は無知であり、
世間の人々を欺いているからである。〈思所成の智慧〉を修習し
ている者たちは、錯誤知を弁別し、汚れなく、退転することもな
い、究極的真実(勝義)の認識手段を目の当たりにする。それに
ついて、少しかだけ説明した。」

sāṃvyaāvahārikasya caitat pramāṇasya rūpam uktam. atrāpi pare
mūdhā viśaṃvādayanti lokam iti. cintāmayīm eva prajñām anuśīlayanto
vibhramavivekanirmalam anapāyi pāramārthikaṃ pramāṇam abhi-

mukhīkurvanti. tad api leśataḥ sūcitam eveti. (PVin 1 44,2-6)

ここにおいて、〈思所成の智慧〉を修習することによって、究極的な認識手段が体得されることが明言されている。

なお、『知識論決択注』では、修習の対象については、ダルマキールティの説明に倣い、四諦が述べられるだけのようである¹⁴⁾。また、ヨーガ行者の認識は「意による認識」とされることも付記しておく (PVinT₁ D117a5, P135a3)。

4. ヨーガ行者の認識が「知覚」とされる理由

仏教論理学派におけるヨーガ行者の認識の位置づけを考える場合、シュタインケルナー教授 (Steinkellner 1978) が指摘する通り、「推理知は、対象の普遍相を捉える点で、対象をそのままに認識するものではなく、それ自体は錯誤したものである」という点が重要である。仏教論理学派において、ヨーガ行者の知覚は、より明確に概念知 (分別知) である推理知から区別される。

『知識論決択注』で、ダルモータラは、ヨーガ行者の認識は、正しい認識手段によって確定されたものを修習して得られることにより、その正しさが確定されることを強調する¹⁵⁾。

では、明瞭な顕現を有せば、なぜ知覚なのか。言葉に関わる概念知とヨーガ行者の認識の違いは、『論理の滴注』にまとまった説明が見られるので、そちらを参照したい。

「明瞭な顕現を持つので、無分別である。というのも、概念知は、言語協約の時点で見られたものとして事物を把握するとき、言葉と結びつく可能性をもったもの (= 顕現) として把握するはずである。しかし、言語協約の時点で見られたということは、言語協約の時点で生じた知の対象であるということである。そして、ちょうど、先に生じて [すでに] 消滅した知が現在は存在しないように、そのように、事物が〈先に消滅した知の対象であるということ〉も、現在には存在しない。したがって、事物の非真実の

性質を把握 [する知は]、現前しないものを把握するから、不明瞭な顕現を持ち、概念を有するもの (有分別) である。したがって、明瞭な顕現を持つならば、無分別である。」

sphuṭābhatvād eva ca nirvikalpam. vikalpavijñānam hi saṅketakāladr̥ṣṭatvena vastu gr̥hṇac chabdasamsargayogyam gr̥hṇīyāt. saṅketakāladr̥ṣṭatvam ca saṅketakālotpannajñānaviṣayatvam. yathā ca pūrvotpannam vinaṣṭam jñānam sampraty asat, tadvat pūrvavinaṣṭajñānaviṣayatvam api samprati nāsti vastunaḥ. tad asadrūpaṃ vastuno gr̥hṇad asannihitārthagrahītvād asphuṭābhaṃ vikalpakam. tataḥ sphuṭābhatvād nirvikalpam. (NBṬ 69,3-7)

このように、「言葉と結びつく可能性を持った知が概念知である」(NB 1.5) という仏教論理学派の概念知 (分別知) の定義を利用し、言葉との結びつきから、ヨーガ行者の認識が、明瞭な顕現を持ち、概念を離れたものであることを論証しているということが言えよう¹⁶⁾。

5. まとめ

ダルモッタラは、『知識論決択注』および『論理の滴注』においてヨーガ行者の認識を論じているが、両書において、ヨーガ行者の認識の理解について、本質的な差異はない。ただし、『知識論決択注』において、ダルマキールティが修習の段階 (*krama*) を論じているのに合わせ、ダルモッタラも修習の過程をより明確に説明していることは特筆される。

さらに、「ヨーガ」の語およびその意味をめぐっては、入門書である『論理の滴注』が、「三昧」という、世間での一般的な説明を与えるに止まっているのに対し、『知識論決択注』は止観という、仏教の伝統において重視される二つの側面を明確に読み込んでいることは、後代への影響という点でも興味深い。

最後に、ヨーガ行者の認識を議論するにあたり、ダルモッタラが重視したことは、ヨーガ行者の認識が明瞭である点と、無分別である

ということの論理的関連であった。ここでは、分別の定義において言語との結びつきを重視する仏教論理学派の伝統に従いつつ、ヨーガ行者の認識が無分別であり、それゆえに「知覚」という認識に分類されることを説明する。

注

- 1) Cf. e.g. AP₁ 125,21.
- 2) Cf. PVin 1.
- 3) Cf. PVin 1, Introduction.
- 4) Cf. DhPr, Introduction.
- 5) 石田2016参照。
- 6) 本稿での引用部分からも推測されるように、ゴク・ロデンシェーラップによる『知識論決訳注』のチベット語訳については、サンスクリット語原典からの逸脱と思われる箇所が、単語だけでなく構文レベルでも散見される。本稿では、可能な限り、サンスクリット語の並行文が得られる箇所を取り上げ、ダルモータラを考察することとする。
- 7) ダルマキールティの『知識論評釈』第1章の議論については、稲見1989を参照されたい。
- 8) *upalakṣaṇa* は、一部で全体を表現する比喩的技法とされる。
- 9) *bhūtārthabhāvanāprakarṣaparyantaṃ yogijñānaṃ ceti. yogah samādhiḥ, cittaikāgratālakṣaṇaḥ. niḥśeṣavastutattvavivecikā prajñā. yogo 'syāstīti yogī. yogino yaj jñānam, tat prayakṣam.* (TBh 19,11–13) 「真実の対象を瞑想する昂揚の極限に生じるヨーガ行者の認識も (知覚である)。ヨーガとは瞑想であり、心がただ一つの対象をもつことを特徴とする。(また、) あらゆる実在の真実を識別する洞察知 (智慧) である。(そのような) ヨーガを持つものが、ヨーガ行者である。ヨーガ行者の認識、それは知覚である。」
- 10) Cf. PVin 1 p. 27, note q.
- 11) 戸崎1990: 58–59に和訳がある。
- 12) この部分は、チベット語訳に問題がある。サンスクリット語テキストは、*arthān grhītvā* (PVin 1 27,9) であるが、『知識論決訳』本文 (PVin₁ 1 72,30) 及びダルモータラ注のテキストは、ともに *bzuñ ba nes pa'i don* である。なお、この一文はプラジュニャーカラグプタの *Pramāṇavārttikālaṅkāra* に一部改変を伴い引用されるが (Vetter 1966: 74, n.1参照)、そのチベット語訳は、*don bzuñ nas* (cf. PVA₁D te 304a6, P te 377b4) であり、サンスクリット語テキストと一致する。ここは、サンスクリット語の原文を想定した上

- で読解した。
- 13) 和訳および本詩節の解釈にあたって、稲見1989: 60を参照した。なお、稲見1989(注2)が示すように、当該箇所原文は、仏教内外の文献に引用される。
- 14) この部分は、サンスクリット語の原文が想定される。'phags pa rnam
kyi bden pa bzi la | 'bras bur gyur pa ñe bar len pa'i phuñ po lña ni sdug bñal
lo || de dag ñid sred pa dañ lhan cig pas rgyur gyur pa ni kun 'byuñ ño || ñes par
legs pa'i rañ bzin du gyur pa'i sems ni 'gog pa'o || rañ bzin de ñid thob pa'i rgyur
gyur ba bdag med pa la sogs pa'i rnam pa can gyi sems kyi khyad par ni lam mo ||
'di dag mthoñ bar mñon sum du byed pa'i šes pa gañ yin pa de mñon sum yin pa
de bzin du de dañ 'dra ba'i don can gyi rnal 'byor pa'i šes pa mtha' dag mñon
sum gyi tshad ma ñid do || (PVinT₁ D118a2–4, P136a2–4); phalabhūtāḥ pañca
sakleśaskandhā duḥkhākhyam satyam ekam. ta eva hetubhūtās trṣṇāsahāyāḥ
samudayākhyam satyam dvitīyam. cittasya niṣkleśāvsthā nirodhākhyam satyam
trīṭyam. tadavasthāprāptihetunairātmīyādyākāraś cittaviśeṣo mārgākhyam satyam
caturtham iti. (DhPr 67,16–18).
- 15) 戸崎1990: 58(注2)参照。また、ヨーガ行者の認識(知覚)の整合性を巡っては、岩田1987による、ダルマキールティやブラジュニャーカラグプタの議論を参照した考察があり、参照されたい。
- 16) ディグナーガの「概念化」(kalpanā)の定義に対する様々な解釈の可能性については、Funayama 2005: 279–283を参照されたい。

一次文献

- AP_J Apohaprakaraṇa (Jñānaśrīmitra): Ed. Lawrence J. McCrea and Parimal G. Patil, see McCrea/Patil 2010, 99–128.
- TBh Tarkabhāṣā (Mokṣākaragupta): Ed. H. R. R. Iyengar, *Tarkabhāṣā and Vādasthāna*, Mysore 1952 (2nd ed.).
- DhPr Dharmottarapradīpa (Durvekamiśra): Ed. D. Malvania, *Dharmottarapradīpa: Being a sub-commentary on Dharmottara's Nyāyabinduṭīkā, a commentary on Dharmakīrti's Nyāyabindu*, Patna 1955.
- NB Nyāyabindu (Dharmakīrti): see DhPr.
- NBT Nyāyabinduṭīkā (Dharmottara): see DhPr.
- PVA_t Pramāṇavārttikālaṅkāra (Prajñākaragupta), Tibetan translation: D4221, P5719.
- PVin 1 Pramāṇaviniścaya (Dharmakīrti), chapter 1: Ed. E. Steinkellner, *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya. Chapters 1 and 2*. Beijing – Vienna 2007.

PVin_t 1 Pramānaviśāyā (Dharmakīrti), chapter 1, Tibetan translation: see Vetter 1966.

PVin_T 1 Pramānaviśāyāṭīkā (Dharmottara), Tibetan translation: D4227, P5727.

参考文献

Funayama 2005

Toru Funayama, 'Perception, Conceptual Construction and Yogic Cognition: According to Kamalaśīla's Epistemology,' *Chung-Hwa Buddhist Journal* (中華佛學學報) 18, 273–297.

McCrea/Patil 2010

Lawrence J. McCrea and Parimal G. Patil, *Buddhist Philosophy of Language in India: Jñānaśrīmitra on Exclusion*. New York: Columbia University Press 2010.

Steinkellner 1978

Ernst Steinkellner, 'Yogische Erkenntnis als Problem im Buddhismus', in G. Oberhammer (ed.), *Transzendenzforschung, Vollzugshorizont des Heils*, pp. 121–134. Wien.

Vetter 1966

Tilman Vetter, *Dharmakīrti's Pramānaviśāyāḥ, I. Kapitel: Pratyakṣa*, Wien 1966.

石田2016

石田尚敬「瞑想者の認識をめぐる考察—仏教認識論・論理学派を中心に—」『愛知学院大学禅研究所紀要』44, 25–45.

稲見 1989

稲見正浩「ダルマキールティにおける仏道」『日本佛教學會年報』54, 59–72.

岩田 1987

岩田孝「ヨーガ行者の知の整合性について—法称説を中心として—」『比較思想の世界』北樹出版, 179–206.

戸崎 1990

戸崎宏正「法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第1章 現量 (知覚) 論の和訳(6)—ヨーギンの現量と似現量—」『西日本宗教学雑誌』12, 58–62.

(平成28年度科学研究費補助金・若手研究(B)・課題番号26770021による研究成果の一部)